

## 教科等の本質的なねらいとのバランスがとれたクロスカリキュラムの研究

Study on balanced Cross-Curriculum with the essential aims of subjects.

兵庫教育大学附属中学校 研究部

校長 小西哲也 (KONISHI Tetsuya)	副校長 大森敏 (OMORI Satoshi)	主任 田原春幸誠 (TAHARABARU Kousei)
副主任 梶谷彰信 (KAZITANI Akinobu)	雨宮久仁 (AMEMIYA Kuni)	柴田映里 (SHIBATA Eri)
山口七瀬 (YAMAGUCHI Nanase)	真鍋朋聖 (MANABE Tomosato)	小松俊介 (KOMATSU Syunsuke)

### Abstract

中学校における教育現場では、教科担任制を中心とする様々な要因から、カリキュラム・マネジメントを捉える際の三つの側面の中でも「教科等横断的な視点で教育内容を組織的に配列する」を実践している学校は少ない。本研究は、そのような三つの側面の中でも、中学校現場に対応できる「教科等横断的な視点で教育内容を組織的に配列する」の効果的な実践方法として、総合的な学習の時間を主軸とする「クロスカリキュラム」に注目し、その効果を検証する。また、この研究を通して、自立した一人の大人として生きていくために必要な資質・能力を、学校教育活動の中で獲得させ、本校の目指す生徒像である「物事を多角的に捉え、やり抜く力をもつ生徒」の育成を目指す。

キーワード：クロスカリキュラム、総合的な学習の時間、資質・能力、同僚性、授業改善

Key Words : Cross-Curriculum, Total Learning Time, Competencies, collegiality, Teaching improvement

### 1. 研究の背景

#### (1) はじめに

本校の生徒は加東市を中心に、神戸市や姫路市等、県内の様々な場所から通学している。その中でも兵庫教育大学附属小学校からの入学者が半数を超える。兵庫教育大学の教員や学部生・院生との関わりはあるものの、地域との繋がり一般的な公立中学校に比べて希薄な状況である。また、教員の平均年齢が 33.4 歳と若く、基本勤務年数 3 年という短い期間での人事異動が行われる。県内だけでなく他府県からの異動もあり、出身地による文化差も大きい現場である。

#### (2) 生徒の現状と課題

学校全体の雰囲気は落ち着いており、目立った生徒指導事案の少ない学校である一方で、学力差は大きい。加えて、特別支援学級の設置はないものの、様々な課題を抱えた生徒も在籍している。

平成 29 年度の教員研修や生徒アンケートの中で、生徒の課題として「最後までやらずにあきらめる」ことが挙げられた。表現活動における積極性は高く、グループでの学習活動に対する抵抗は少ない反面、一人でじっくり考えて答えを出したり、難しい課題に挑戦したりすることに消極的な生徒が多くみられた。また、物事を一面的・断片的に捉え、自分に都合のいい形で解釈してしまう視野の狭さから、人間関係のこじれが生じ、トラブルに発展することも多い。

#### (3) 研究の目的

本校の状況や生徒の実態を踏まえると、生徒たちが社会の一員となったとき、現在では予測できない大きな社会の変化に対応できず、それに飲まれてしまう生徒が多いのではと危機感を覚えた教員が多かった。そこで、それらを解決していくきっかけを生み出すために、教員が各々に資質能力の獲得に邁進し続けることはもちろん、チーム学校として学校全体で取り組んでいく必要があると考えた。そこで、目指す

生徒像を「物事を多角的に捉え、やり抜く力を持つ生徒」とし、それを実現するための方策を、「カリキュラム教育内容の改善」と「教育方法の改善」の双方から立てた。

教育方法の改善の方策として主体的・対話的で深い学びという視点からの授業改善を推進する。そして、主体的・対話的で深い学びに向かう姿勢を培っていくには、一つの教科等の枠にとどまらない教科等横断的な取組が今後必要となってくる。また、カリキュラム教育内容の改善の方策として注目したのがクロスカリキュラムである。よって、二つの方策は相互に関連してくる。

## 2. 研究の実際

### (1) クロスカリキュラムについて

「物事を多面的・多角的に理解する力」を育み、将来社会で求められる資質・能力を培っていくために注目したのが、教科等横断的な教育活動である。知識と知識がそれぞれ独立した情報としてインプットされがちな授業の中で、他教科等の学習内容との繋がりに気付けたときの生徒の反応の良さは、多くの教員が感じているところであった。しかし、それらはこれまで偶発的なものにすぎず、頻繁に起こっているものでもなかった。もしも、生徒の「偶発的な気づき」を「必然的」なものにできれば、「物事を多面的・多角的に理解する力」を身に付けさせられるのではないかと考えた。

そして、それを実現するためのカリキュラム教育内容の方策として注目したのがクロスカリキュラムである。クロスカリキュラムとは、国際理解、環境、人権、健康など複数の教科にまたがるテーマやカリキュラム全体で強調されるべき理念、あるいは育成されるべき学力の存在を明確にして、個々の教材教育の中で、そうしたテーマ、理念、学力を扱うことを位置づけたり、既存の教科とは別に異文化理解や環境教育といった総合的なテーマを扱う教育内容の時間を設定したりする方法（関 2016）である。中学校現場でこれまで課題とされてきた教員間連携という視点からみても、この取組を実践するためには教科等を超えて授業内容を交流する必要がある。そのため、教科担任制である中学校現場でよく挙げられる「教科の壁」という課題にも一石を投じる取組となる。

### (2) 公立中学校への還元の見点

平成29年度に先行して行った研究会を終えて、二つの大きな課題に直面した。

一つは、設定した資質・能力の獲得に特化するあまり、教科等の本質的なねらいの実現が崩れてしまっていた点である。クロスカリキュラムを研究していく上で、授業の中で教科として獲得させたい力を見失うことなく、他教科等との共通のテーマに迫り、資質・能力の獲得が期待される授業や単元をデザインすることが重要なポイントであると考えた。それを本校では「バランス」と言っている。このバランスの取れた授業を考えていくにあたり、学校全体で取組を進めなければならないこと。もちろん、個々の教員の授業力も大いに求められることも分かった。そのため、学校全体の研究活動と並行して、教員の授業改善に向けた取組も行うことを決めた。

もう一つは、教科等横断的な指導を可能にする指導計画の汎用性である。授業に取り組んだ教員や研究会への参加者の多くはクロスカリキュラムに対する必要性を感じていた。その一方で、「多忙な中でこれだけのシステムをつくれるのか」、「参考にできる実践例が少ない」等、この取組を自校に持ち帰り継続的に取り組んでいくことの難しさも同時に感じていた。

このことから、今回の取組をシステム化することで、公立学校での取組に還元できる研究を目指し、学校組織として生徒たちの知的好奇心を引き出し、主体的・対話的で深い学びの促進に繋げていく。

以上より、教科等の本質的なねらいと資質・能力獲得のバランスがとれたシステムづくりを進めることに決めた。

### (3) 兵教大附中型クロスカリキュラムのイメージ

クロスカリキュラムとは、「あるテーマによって教科等を横断的につなぐカリキュラム」である。設定さ

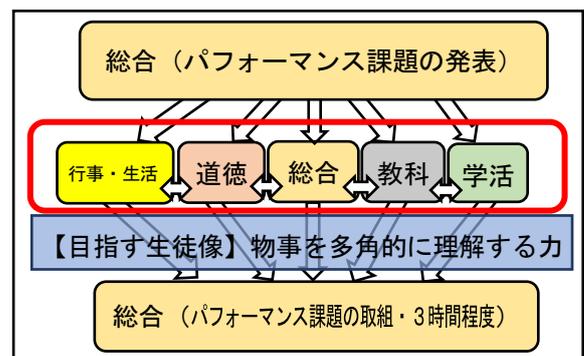


図1 兵教大附中型クロスカリキュラムのイメージ

れたテーマについて関わりのある内容を教科等横断的に扱うことで、個々の教科等だけでは身につけづらい資質・能力をも育成しようとするものである。

クロスカリキュラムの構想として、教科・特別活動・道徳を総合的な学習の時間（以下、「総合」と表記）を用いて関連付けさせることが一般的であり、本研究においてもそれを採用する。ただし、それらに加え本校では、学校行事・学校生活も関連付けたクロスカリキュラムに取り組んでいる。また、図 1 のように総合をカリキュラムの軸教科と設定し、「オリンピック・パラリンピック（以下、「オリ・パラ」と表記）教育」をテーマにして、現代社会に求められる資質・能力の育成をはかってきた。これらの新たなクロスカリキュラムを「兵教大附中型クロスカリキュラム」と呼んでいる。

### 3. 研究の内容

#### (1) 教科等の連携

現状の年間指導計画では、他教科等との関連について授業の中で生徒の「これ、〇〇の授業でも学んだことがある！」という発言の中から気づくことが多い。これらは、いわゆる偶発的に生まれた学びであり、このような学びに必然性を持たせるには、教科等での共通認識や、教師間のコミュニケーション、活発な同僚性が求められる。また、教科等横断的な取組を行うにあたっては、従来の各教科等における指導計画（縦のライン）に加えて、教科等を超えて共通した学習内容の指導計画（横のライン）を揃える作業が必要となってくる。それをその都度、当該教科・領域同士のやり取りの中で実現していくシステムだと長く続くものではない。ゆえに、研究を進めていく上で、横のラインをそろえた目安となる指導計画を提示することとする。向こう 2 年間の研究の中で、横のラインをそろえた具体的な実践を重ね、「現代の諸課題における問題解決のために必要な資質・能力」の具体的な項目の獲得を中心に据えた研究授業を年間複数回にわたり設定し、その中で見えてきた成果や課題をもとにシステム、理念及び期待される効果をまとめていく。そして、それらは研究発表会や研究授業、本校 Web ページ等を通じて広く発信していく。

#### (2) オリンピック・パラリンピック教育

クロスカリキュラムに取り組んでいくにあたり、現代社会における諸課題という共通したテーマのもとで各教科が取り組むことで、学校全体の動きにしていくことが必要である。ある特定の教科における連携は、教科担当者同士の打ち合わせの中で共通点を見つけて即、授業に取り組むことができるので一見やりやすそうではあるが、特定の單元における取組に終わってしまうおそれがあり、学校全体の動きになりづらい。さらに前述した通り、現代社会における諸課題について考えていくことは、生徒の将来を見据えた上で非常に重要であり、資質・能力を獲得させていくことにより深く関わると考えられる。その諸課題の中からテーマを一つ取り上げ、学校全体の共通テーマとし、年間 4 回行われる取組をつなぐことで関連性も深まると考えた。そのテーマとして取り上げたのが、「オリ・パラ教育」である。これをテーマとして選んだ理由は大きく三つある。

一つは、オリ・パラ教育がもつ教育的な価値とその深さである。平成 29 年版学習指導要領改訂に際しては、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として、「オリンピック・パラリンピックを契機に豊かなスポーツライフを実現する力」と例示されている。オリ・パラにおいて選手ばかりが輝かしく注目されがちである。しかし、選手以外にもそれを支えてきた家族や仲間、オリンピックを目前に敗戦した選手、オリンピックを取り巻く商業主義のような諸問題など、さまざまなことを知り、あらゆる角度からオリ・パラを考えることで、目指す生徒像である「物事を多面的・多角的に理解する姿」にも繋がると考えている。

二つは、適時性である。今後、2020 年東京オリンピックに向けて、生徒の興味・関心は確実に高まっていくと予想され、生徒にとって身近なスポーツの祭典であるオリ・パラを学校現場で扱うことで、スポーツ選手の持つ「諦めない心・やり抜く力」が本校の目指す生徒像「やり抜く力を持つ生徒」に繋がり、そのスポーツマンの精神を自分事として捉えることができるのではないかと考える。

三つは、生徒自らの未来に対する思いである。兵庫県に住んでいる生徒たちにとって、今後開催される東京オリンピックやパラリンピックは「遠い街で行われる体育的イベントやお祭り」のように捉えている生徒が多い。しかし、この東京オリ・パラが未来の日本に与える影響は大きく、日本に住む一人の

若者としてこれを考えることは、生徒自らの未来を考えるきっかけになると考える。並行して、徐々に生徒自身の私的関心を社会的関心へと向かうような手立てを行うことで、社会的参加意識をこれまで以上に養う。つまり、教室内の教育的関心を学校の外に向けること、自らの将来へ向けることを目指している。

その他にも、教師理解や社会（企業）支援を得やすい環境が比較的整いやすいことや、教科担任制の中で、各教科等や教師同士をつなげるテーマとして共通認識をもちやすいこと等がある。

また、現在本校では、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会による東京2020教育プログラム「よい、ドン！」の認証を受け、オリンピック・パラリンピック教育の教材支援や授業計画の立案、公認プログラムマーク・応援プログラムマークの利用等を行っている。この他にも、東京都教育委員会からの教育支援や、パナソニック株式会社が主催するオリンピック・パラリンピック教育推進事業の講習会へも積極的に参加している。

これらの理由から「オリ・パラ教育」をテーマと設定した。

### (3) 総合的な学習の時間の位置づけ

現状の総合は他教科等との関連が薄い取組も多く、独立したものになりがちである。総合を共通のテーマのもとに学習を重ねたクロスカリキュラムのゴールと位置づけ、獲得した知識を活用し発表や交流をする機会とする。その中で、共通のテーマとともに生徒たちに示す「パフォーマンス課題」の設定も、本取組の中の重要な役割を担っている。

平成30年度に研修会を行っていただいた兵庫教育大学 奥村好美講師や、京都大学 石井英真准教授は、講演の中で「真正の学び」について言及された。学習の中で得た知識や技能は、それ自体を活用する場を示さなければ、生徒は生きたものとして習得することはない。各教科共通のテーマの元に得られた知識を活用する場を示すために、学習の目標となる具体的な表現活動について、パフォーマンス課題として示すことにした。具体的には、表1のようにパフォーマンス課題を設定し、各教科で学習した内容を活用することで、資質・能力の獲得につなげていく。

表1 年間4回のパフォーマンス課題

	パフォーマンス課題
オリ・パラ教育 シーズンⅠ (文化)	あなたは日本を訪れる観光客を増やす目的で、日本の魅力を発信することになりました。東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに日本に興味を持ったり、実際に日本を訪れたりした外国人に新聞作成ソフト「ことまど」を活用して宣伝用の新聞やポスターを作成しよう。
オリ・パラ教育 シーズンⅡ (スポーツ)	昨年度の附中体育祭は、以下のような反省が残った。 ① 競技におけるルール平等性に欠ける ② 怪我や病気で競技へ参加できなくなった際に、活躍の場が激減する ③ 競技中の怪我が多い これらの課題を解決し、みんなが楽しんでもくれるような体育祭を企画するとすれば、あなたならどのような体育祭を企画するか。企画書を体育祭実行委員会へ提出しよう。
オリ・パラ教育 シーズンⅢ (精神)	オリンピックとパラリンピックは、まったく別の時代背景やコンセプトの中で行われてきました。それが、時代とともに同時期に行われるようになり、現在では「オリンピックとパラリンピックを分ける必要があるのか」という議論にもなっています。そこで、あなたたちは「オリンピックとパラリンピックは分ける必要があるのか」というテーマで、ディベートをすることになりました。ディベートを通して、オリンピックとパラリンピックのこれからの在り方について考え、ディベートにおいて説得力のある弁論を行うための立論を考えましょう。
オリ・パラ教育 シーズンⅣ (環境)	東京2020を機に、たくさんのゴミが生み出され、もたらされる。東京2020後の私たちの生活の中で、ゴミをどのように活用していくか。持続可能な活用や活動内容を考え、「東京2020後のゴミの活用方法について」というテーマで附中環境フォーラムを実施し、発信しなさい。

課題設定が生徒にとってより現実的であり、身近なものにすることで、課題への取組の必然性を感じさせ、より積極的に取り組めるように働きかけていきたいと考えている。シーズンIVのパフォーマンス課題設定に関しては、全校生徒にアンケートをとり、生徒たちによる会議の中で自らが設定し、環境フォーラムを通して発信することができた。

また、総合の全時数の中にこの取組に関する総合がどれだけの割合を占めるのかも重要である。本校では「オリ・パラシーズン」という期間を設け、一つのシーズンを開始から終了までを約1か月間とり、各教科等での取組に加え、総合としても全5時間を目安にした一つのパッケージとして進めた。そして、パッケージの中で探究活動としてサイクルを確立するために、試行錯誤しながら進めてきた。下記表2は平成30年度の活動を例としてまとめたものである。

表2 探究プロセスをもとにした、実際の活動の流れおよび事例・写真

活動項目	今年度の具体的な活動内容
1 課題の設定	<p>テーマおよびパフォーマンス課題の提示。今年度は全校向けの教師によるプレゼンや聞き取り学習、アンケート、体験活動等を通して、生徒への問題提起や課題の提案を行った。</p> 
2 情報の収集	<p>PCや図鑑等を活用した情報収集。教科等の授業でも関連内容を並行して取り扱う。生徒がパソコン室や自宅等を利用して自分で調べることも推奨している。</p> 
3 整理・分析	<p>パフォーマンス課題に示した表現活動に向けて、知識や情報の整理を行う。平成30年度は、思考ツール等を活用した班活動に取り組んだ。</p> 
4 表現活動	<p>表現活動を通して学習の成果を発表する。新聞社のアプリを活用し新聞作成や体育祭に向けての企画書作り、ディベート、フォーラム等に取り組んだ。生徒を主体としながら地域人材や大学教授といった様々な資源の活用も視野に入れることができた。</p> 
5 振り返り	<p>活動の振り返りと次の活動に向けて、新たに生まれた疑問やテーマについて確認する。</p>

平成30年度は年内35時間のうち年間4回のシーズンを設けたため、合計20時間の配当になった。これは学校の状況に合わせて回数や時期を調整し、無理なく年間の予定に組み込んでいくことによって、より多くの学校で実現可能なパッケージになるのではないかと考えている。

#### (4) 様々な体験活動

探究活動における課題設定のきっかけやオリ・パラに更に興味を持ってもらうためにも、車いすバスケットやブラインドサッカーの体験やオリンピックや起業人による講話、兵庫教育大学の先生方や地域の方々による探究型授業等、様々な体験活動を行っている。学校外の方々に講話していただく際は、本研究を意識して内容に組み込んでもらうようにした。



北京五輪日本女子代表小林祐梨子氏



車いすバスケット体験の様子

#### (5) 年間の取組をつなぐ問い

各シーズンの最初と最後には、「日本に生きる一人の若者として、どんな自分になりたいか」という問いに対して生徒自らで考えている。年間を通して取組の中で将来を見据え、自分がどのように変容していくかを見られる記録として残すためである。一連の取組を、総合の年間計画の中に反映させ、教員への周知と徹底を図った。また、教科等間関連についても、年間指導計画を元に、全教科の流れが一覧になったものを作成し、いつどの教科等がテーマに関連した授業を行っているかが一目で分かるようにしている。

### 4. その他の取組

教科等横断的な取組を行うにあたり、以下の点も重点事項として並行して行っている。

#### (1) 授業改善研修

教員をキャリア・教科・学年がバラバラになるような五つの班に分け、板書型指導案を用いて定期的に授業研究会を行う。事前の打ち合わせは同教科同士で行い、研究授業や授業検討会は班で行う。二週間に一度のペースで行っており、教科等横断的な取組の柱となっている。管理職や養護教諭も参加している。また、令和元年度はこの取組を積極的に公開していく。

#### (2) 自主研修会「まめ会」

放課後、若手を中心に勉強会を行っている。主となる教員を決め、その教員が全ての内容を決定することができる。時間は約1時間であり、月に一度ほど開催している。

(例)「担任必見、合唱指導入門!」「教育 ICT 活用オススメ」「ESD? SDGs?」「不登校支援について」

#### (3) 他教科授業立案研修

(1)で述べた授業改善班で指導案を立案する。ただし、教科は各々の班に無い教科の立案であり、教科等の本質的なねらいとのバランスは必ず意識する。

#### (4) 職員文庫の設置

教員が勧める一冊を所定の場所に置き、自由に閲覧できるようにしている。共通の話題ができる。

#### (5) 目標の設定

自らの将来や目標に向かう主体性を高めることも重要である。そのためには生徒自らがどんな自分になりたいかということが具体的に表現できるべきである。ところが、その将来に対する目標(大目標)が他者に伝えられる生徒は少ない。それゆえ、それを表現できるよう、本校独自の日々の学習の記録をするノートを用いて大目標を受けての中期的な目標(中目標)を学期単位で表現させ、さらにその考察のための週目標を小目標とおき、日々の自分の振り返りに役立てる。

## (6) オープン会議

少しでも多くの生徒の意見を取り入れることを目的として、学校で最も生徒たちが通る場所で昼休みに教員または生徒による会議を行っている。その際に使用したホワイト・ボードはその場に置いておき、自由に意見を書き込むことが可能な状態を保っている。

## 5. バランスのとれた実際の授業例

バランスを意識した授業例として、第1学年数学科「資料の活用」を紹介する。

シーズンⅢ「精神」のパフォーマンス課題（表1参照）に対する授業である。

走り幅跳び選手2人の記録について、名前を伏せた状態で比較し、どちらがオリンピックに出場する代表選手としてふさわしいかを数学的見方・考え方を用いて考えた。授業の終盤に以下のことを告げた。



1年数学の授業風景

- ① データにバラつきがあり、最高値の高いA選手はリオ・パラリンピックのゴールドメダリストである
- ② データは安定していたが、最高値がA選手ほど高くないB選手はリオ・オリンピックのゴールドメダリストである
- ③ A選手は大会前からオリンピックへの参加を熱望していた
- ④ 器具等様々な理由からオリンピックには出場できなかった
- ⑤ リオ・オリンピックでは卓球女子ポーランド代表で右手のない選手がオリンピックもパラリンピックも出場している（パラリンピックは金メダル）

授業の終盤は数学という教科を少し離れ、オリ・パラの在り方を考えさせた。

各教科において、オリンピックとパラリンピックを分けるべきでないという立場の授業や分けるべきだという立場の授業等、一つの教科におけるバランスと、取組全体のバランスの両方を意識している。また、取組全体のバランスに関しては、教師同士のプロジェクト会議と呼ばれる会議で確認し合っている。

## 6. 成果と課題

### (1) 成果

- ・ 生徒はもちろん、教師にも「物事を多角的に捉える力」が取組前と比較すると、十分についてきていることがアンケートより分かっている。学校生活だけでなく、日常の中でも目の前の情報や現象を多角的に捉えることができるようになってきている。
- ・ 課題設定の際、生徒の意見を少しずつ反映させることで、社会的関心から私的関心へと少しずつ向かうようになってきた。
- ・ 他教科等との関連を探しながら授業を受ける姿や、事象を与えられた情報のみで肯定的又は否定的に捉えたりすることが減り、自らの調べた情報を基に判断を行う姿が出てきた。
- ・ 生徒自らテーマに関心を持って調べたり、それを発信したりする姿が出てきた。それに取り組む教師の姿にもポジティブな影響が出た。教師も前向きに取り組むようになった。
- ・ 職員間のコミュニケーションが飛躍的に増えた。授業内容のすり合わせだけでなく、互いに授業を見合う流れもできてきた。
- ・ 教科担任制により、教科等間の連携が不十分であると考えていたのに対し、実際は学年間の連携よりも教科内の連携が不十分であることが分かった。
- ・ 県内外問わず、たくさんの公立中学校から視察が訪れ、様々なアドバイスやご指摘等をもらうことができた。また、他校の研修にゲストとして呼ばれたり、中学校におけるカリキュラム・マネジメントの実際として講演を行ったりすることができ、取組の注目度の高さが再確認できた。
- ・ 体験活動（車いすバスケット体験）や映像視聴（ブラインドサッカー等）、オリンピックによる講演会からオリ・パラに対する興味・関心を予想以上に得ることができた。



他教科授業立案研修



熊本からの視察に応じる研究部

**NEW CREATE !** 2019.8.29 熊勢町教育委員会だより

2/22 カリキュラム・マネジメント研修  
講師：兵庫教育大学附属中学校 田原春 早誠先生・梶谷彰徳先生

学校全体のシステムを整理して、変えていこうとしているが、とても大変だとおっしゃる御座います。カリキュラムについても他校に参りましたが、最近どの研修を受けても、「先生同士つながり」という言葉を聞きます。結局そこが大事だし、今の態勢に足りない部分だとおっしゃいます。連携している先生からいろいろ教えてもらうのは、受け取りやすかったです。ありがとうございます。

「目指す子ども像」を考える中で、職員に聞かれているものが一貫すると、良いけれどいいように思いますが、行事を通しての子どもたちを育てる」という職員共通認識・目標が大切で、そういうことを話し合える時間・環境が重要だと感じました。次年度以降、行事等の改善もあると思いますが、「ふんば」いいねもって思える。「ふんば」の部分がふんばになっていけるようにしたいと思っています。それができたら、カリマネもできそうです。

他の研修でも印象を受けたのですが「学校教育目標」「目指す生徒像」を職員全体で話し合い共有すること何よりでした。カリマネも学校のしつけも全員一貫なければ継承すること1年感じました。学校の旗となる研修を全体共有し、教育に活かしていきたいです。本日はありがとうございました。

兵衛大前中の取り組みは深く驚かされています。テーマの明確さと教員の「覚悟」とやる気、意力が大切だと感じました。オンラインブック・パブリックというテーマで、中学生として視野を広く持たず、取り組んでいるという点も良いですね。ワークショップでは、目指す姿をすることない学校教育目標、目指す生徒像について先生から一言に考えることができたのが良かったです。各学校も改めて意識を高めたいという意気込みが伝わりました。

時代の流れ、カリキュラム・マネジメント、個別に学校のカリキュラムが組まれる。審判の力は期待されている。本日の研修でチーム学校になるというツールとして、とても期待されているのにも関わらず、全てにおいて、具体性が求められている状態を感じました。学校教育目標、主に生徒像をどう構築するか、目指す生徒像、分かりやすい、書きやすい、具体的なもの大切さを思った。たくさんのご意見を頂くと、教員のベクトルが多岐に渡り、具体化することが難しく、誰がメインテーマとするのか難しかったです。

梶谷先生・田原先生は国でもカリマネの発展をされたそうです。「何ができてそう「いいねい」と思えるような成果の出る研修でした。田原先生の「覚悟」という言葉が大変響く、書き送られます。梶谷先生・田原先生、今後ともよろしくお願ひいたします。熊勢町教育委員会

こういふ旗となる内容の企画は、少人数で行うのが良いと思う。興味関心がない人がいても「で」がなくなる。何でもそうだが「高次元」と「低次元」が大事なんですね。やる気がました。ありがとうございます。

熊勢町教育委員会から発行された教育委員会だよりでの研修の特集

(2) 課題

- 生徒の変容に関するアンケートの内容やその検証法に課題がある。研究の仮説自体に跡付け感があり、少々雑である。
- パフォーマンス課題への取組からでた成果物の評価をどのようにしていくか。学習の様子や成果物からルーブリックを作成したり、次年度へ向けて検討を進めたりする必要がある。
- 取組もうとする時期次第で、多忙な業務が原因となり十分なコミュニケーションがとれていないことがある。
- 年間の取組をつなげるテーマ「日本に生きる一人の若者として、どんな”自分”でありたいか」という問いと取組との関連性が希薄であり、生徒も教師も系統性を持って取り組むことができていないということ。
- 教師が本来の目標（物事を多角的に理解し、やり抜く力を育むこと）を見失うと、授業そのものが路頭に迷う。様々な場面において目的と手法を確認する作業が定期的に必要なである。
- 生徒がテーマについての関心があってこそ成立する取組であり、並行してそれについて関心をもつような取組や仕掛けが必要不可欠である。
- 教科等横断的な年間指導計画のより綿密な組み立てと、その作成が求められる。
- 目指す生徒像は「物事を多角的に捉え、やり抜く力を持つ生徒」である。今回の取組で「物事を多角的に捉える」に関しては、一定の成果がみられた。しかし、「やり抜く力をもつ」に関しては、目標設定や計画、それを実行する力等に課題が残る。

7. 生徒アンケートについて

	質問	肯定的回答率	肯定的回答率	肯定的回答率	比較 (%)
		7月	12月	3月	
①	学校が楽しい。	68.5	78.5	80.5	+12.0
②	授業内の課題に対して、自ら考え、自ら取り組んでいる。	78.2	81.8	82.1	+3.9
③	テストに向けて自ら学習の計画や目標を立てることができた。	59.7	58.1	60.9	+1.2
④	期末テストでは、自らの立てた目標を達成することができた。	17.4	34.3	38.1	+20.3
⑤	総合的な学習の時間を通して、前向きに学習に取り組むことができた。	71.9	76.2	77.3	+5.4
⑥	パフォーマンス課題は、納得のいく仕上がり・出来になった。	63.7	64.0	69.3	+5.6
⑦	パフォーマンス課題の取組にあたり、計画や見通しをもって予定通りに取り組むことができた。	55.2	67.7	71.0	+15.8
⑧	授業で得た知識を、他教科で得た知識と関連付けて考えることがあ	60.2	70.0	79.0	+18.8

	る。				
⑨	班活動の中で他の人と意見が違ったとき、相手の考えを踏まえて、より良い意見を出そうとしている。	72.3	77.2	79.2	+6.9
⑩	班での話し合いを通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできている。	76.4	80.9	81.2	+4.8
⑪	パフォーマンス課題に取り組むとき、各教科等で学んだことを生かすことができた。	50.7	55.1	58.9	+8.2
⑫	パフォーマンス課題に取り組むとき、複数の視点から物事を見ることができた。	65.9	85.5	89.9	+24.0

②～⑦の質問が「やり抜く力」に関するアンケート、⑧～⑫の質問が「物事を多面的に捉える力」に関するアンケートとしている。しかし、前記における課題の通りアンケート内容に課題が残っている。

## 8. 令和元年度の取組に向けての重点事項

- ・ カリキュラム・マネジメントやクロスカリキュラムはあくまでマクロレベルの授業や教育活動の指導改善の一つであり、教師自身の授業力の向上を差し置いて、意味を為すものではない。全教師の意識改善やすり合わせ、授業力向上に向けての取組を行っていく。
- ・ 生徒の興味・関心を徐々に私的関心から社会的関心へと向かうような手立てを行うことで、社会的参加意識をこれまで以上に養う取組が必要である。つまり、教室内の教育的関心を学校の外に向けること、自らの将来へ向けることを目指している。
- ・ 最も大切にしたい教員同士のコミュニケーションや同僚性が、多忙な業務が理由となりとれてないことがある。業務改善や学校伝統文化の見直し等、教員の多忙感を軽減する取組を行う。
- ・ 総合的な学習の時間を軸に、生徒自身から生み出される疑問や課題を基に、探究活動を計画的に進めていく。その中で、シングル・ループ学習からの脱却を目指す。

### 【出典・参考文献】

- ・ 高階玲治, 1996, 「実践 クロスカリキュラムー横断的・総合的な学習の実現に向けてー」, 図書文化社
- ・ 野上智行, 1996, 「総合的な学習への提言ー教科をクロスする授業第1巻「クロスカリキュラム」理論と方法」, 明治図書出版
- ・ 今谷順重, 1997, 「横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム」, 黎明書房
- ・ 文部科学省, 2008, 「中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編」
- ・ 石井英真, 2015, 「今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光か影ー」, 日本標準
- ・ 西岡加名恵, 2016, 「「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」, 明治図書
- ・ 兵庫教育大学附属中学校 平成30年度研究紀要